京機短信

KEIKI short letter

No.319 2018.11.05

京機会（京都大学機械系同窓会）tel. & fax. 075-383-3713
E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp
URL: http://www.keikikai.jp 編集責任者 吉田英生

目次

・中部・関東工場見学……森 暁（pp.1-4）
・大人・若者・大学について怒涛の1960年代からの断章
——京大タテカン問題に端を発して（2）……吉田英生（pp.5-8）
・ウエスティングハウス社とアメリカ合衆国の思い出（7）……中谷 博（pp.9-18）
・淡路島紀行（その5）安藤忠雄建築……藤川卓爾（pp.19-23）
・第13回 京機ミュージックカフェ レポート土肥絵里香さん、ニューヨークから帰国ピアノコンサート～ニューヨーク発ピアノコンサート「BLUEPRINTS Piano Series」～
……北野幸彦（pp.24-25）
・卒業60周年京岬会（昭和33年卒）同窓会……中村弥寿家（pp.26-28）
・昭和35年卒同窓会……矢部 寛（p.29）
・S58卒業の同期会……今谷勝次（p.30）

嵐山 亀山公園から

©京都を歩くアルバム http://kyoto-albumwalking2.cocolog-nifty.com/

中部・関東工場見学

森 暁（H30/2018卒）

平成30年9月24日～26日に、中部・関東工場見学会を開催しました。中部支部ではDMG森精機、三菱自動車の2か所、関東支部では日立製作所、日立建機、宇宙航空開発機構（JAXA）の3か所、計5か所の工場、施設を学生25名で見学させて頂きました。

１．9月24日　中部支部

まず、最初にDMG森精機の伊賀工場を訪れました。5軸加工機をはじめとした様々な工作機械の製造工程を間近で見学しながら、工作機械の材料や歴史、さらには職場環境のことまで、幅広く教えて頂きました。

次に、三菱自動車の岡崎工場を見学しました。ここでは約3万点もの部品からなる自動車の生産ラインの全てを見ることができました。はじめは鉄板だったものが、最後には自動車として走っている姿を見て、ものづくりの面白さ、技術力の高さを目の当たりにしました。

その後、デンソー安城荘にて技術交流会に参加し、三菱自動車、久米様の自動車電動化に関してのご講演を公聴しました。航続距離、充電時間、コスト等の昨今の電動化に関する課題と、その未来に関してプレゼンして頂きました。

夜は学生とOBとの懇親会に参加しました。普段の学生生活ではお会いする機会のないOBの方々と懇親を深めることができました。今の社会で必要とされる人物像から、OBの方々の学生時代のことまで、様々なお話を聞くことができました。

技術交流会

懇親会

２．9月25日　関東支部

2日目は日立製作所の勝田地区研究所を見学しました。無響室、風洞室といった研究所ならではの施設も見学し、洗濯機、掃除機といった家電を開発されている方から製品開発のやりがい、難しさをお聞きしました。私たちが普段何気なく使用している家電が、開発に携わる様々な方々のアイデアの詰まった製品であるということを再認識することができました。夜には、京都大学OBの方々と懇親会を行いました。自分のアイデアがそのまま製品に反映されるといったメーカーでの仕事の面白さや、企業での研究と大学での研究の違いなどをお聞きしました。

日立製作所にて

B4宮木孝輔、B2宇野航平、M1三宅正人、M1森暁、M1長崎意尚、M2西澤和浩、B3上野裕太、M1石原啓基
M1池村翔平、B3吉武裕二、M1山口開陽、B2陳童、B3余合真宙、M1古川眞之、B3増田諒一、B3竹村拓樹、B2豊田みなみ
M1島遼太朗、B3小原輝久、B4古田康晃、B2八田裕輝、M1平井智章、M1山口知紗、M2米田奈生、B3井上実優

３．9月26日　関東支部

最終日は、最初に日立建機の土浦工場を訪問しました。インフラ産業を支える中小型の油圧ショベルが、成形、溶接、組み立てを通して完成していく過程を、技術者の方の詳細な説明とともに見学しました。また、ICTを利用したこれからの建設機械についても知ることができました。

最後にJAXAのつくば宇宙センターを訪れました。宇宙食や宇宙での居住棟といった宇宙での生活環境や、実験棟「きぼう」で行われている実験内容などを見学しました。また、京都大学OBの方々に現在の仕事内容を紹介いただきました。安全性といった宇宙に向けた技術開発の難しさや、開発したものが実際に宇宙で稼働する面白さを、実体験をもとにわかりやすく教えていただきました。学生から質問も積極的に飛び交い、非常に有意義な会となりました。

日立機械式ショベル1号機のU-05（左側）と純国産技術による
日本最初の油圧ショベルUH03（右側）の前で

M1森暁、B3小原輝久、B3余合真宙、B2陳童、B3上野裕太、B3吉武裕二、
B3増田諒一、B3竹村拓樹、M1石原啓基、B2宇野航平、M2西澤和浩
M1長崎意尚、M1池村翔平、B4古田康晃、M1山口知紗、B4宮木孝輔、B2八田裕輝、M1島遼太朗、
M1山口開陽、M1平井智章、M1三宅正人、M1古川眞之、B3井上実優、M2米田奈生、B2豊田みなみ

今回の工場見学では、様々な業種の企業の見学を通じて、企業ごとの特徴を認識することができました。また、OBの方々とのお話から、企業での仕事のイメージを持つことができ、今後のキャリアを考えるうえで非常に為になる機会となりました。このような機会を設けていただいた中部支部、関東支部の関係者の皆様に、紙面を借りてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

大人・若者・大学について怒涛の1960年代からの断章
――京大タテカン問題に端を発して（2）

吉田英生（S53/1978卒）sakura@hideoyoshida.com

１．はじめに

今年5月13日に撤去された京大のタテカン。その後いろいろありましたが、現在は上の写真のような状況です（百万遍交差点東、10月23日）。この間、マスコミや個人のコメントでも多数取り上げられました（8月18日夕刻にはHNKも『それでも彼らが戦うワケは～京大・タテカン攻防の若者たち～』の30分番組を放映）。筆者が目にしたのは、そのごく一部に過ぎませんが、後藤正治氏の日経記事『タテカン考・若者考』（9月18日）は、怒涛の1960年代への言及もあり、共感するところ大でした。そこで、この記事からまったくの個人的な思考連鎖ではありますが、1960年代に関連する三つの断章を拾い上げてみました。

２．大人について

後藤正治氏は、まずタテカン問題につき、次のようにコメントします：

少々、半畳を入れるとすれば、別段、タテカンがあったとてだれが迷惑するでなし、ケイカンを損ねるという杓子定規な適用はいかがなものかと私は思う。

加えていえば、雑多な、さまざまな表現行為があってこそ大学だと思う。ましてや京大は、異才や異能、あるいは一時期、アングラ劇やロックコンサートの場と化した「西部講堂」がそうであったように、“異物”や“異界”への寛容自由度を売りにしてきた学校ではなかったか。

百万遍界隈、かつて数軒並んでいた古書店も一軒のみになっていた。老舗の喫茶店で健在なのは進々堂ぐらいで、タテカンの不在は、大学街のやせ細りの象徴のごとくに映ったのである。

そしてこのあと、今年は1968年におきたフランス5月革命から半世紀ということで、パリ・ソルボンヌの大学街を中心に、街角の壁に書きなぐられた、タテカンならぬ「落書き」（『壁は語る―学生はこう考える』広田昌義訳、竹内書店、1969）に話を展開します。（なお、筆者も拙稿―京機短信315号―でパリの線路わきの「落書き」に話を展開しましたが、後藤氏の深みある展開との差を痛感しました。）そ

して、氏は以下のように記事を結んでいます。

いつの時代も、若者たちの表現活動はアナーキーな色彩を含んでいて、大人たちは眉をしかめるものだ。いずれにせよ、若者が次の時代を担っていく。大人たちにできることはあまりないのだと思う。せいぜい、邪魔をせずにほっておく。それがベターな選択ではあるまいか――。そんなことをつらつら思いながら大学周辺を歩いていた。

『壁は語る』に、こんな一文も見える。《禁止することを禁止する》（＊1）

（＊1）原著 les murs ont la parole - mai68, Julien Besançon では《Interdit d'interdire.》

この文章からの延長線上で個人的にギクッとしました。研究指導の面でも、自分が同様なことをしていないか―学生がもともと有している大胆で伸びやかな発想の芽を、こりかたまった先入観に基づく指導で摘んでいないだろうかと。

３．若者について

私事で恐縮ですが、最近、山本義隆氏の『熱学思想の史的展開―熱とエントロピー』（ちくま学芸文庫、全3巻、2008–9）の「まえがき」と第18–20章を英訳しました（ http://www.aihtc.org/fourier.html ）。同書は熱学史に関して世界的にも稀有の書であるとの思いから、まず、そのなかでも最も興味深い James Watt や Sadi Carnot に関する章から世界に紹介することに着手した次第です。その山本氏の『私の1960年代』（金曜日、2015）は、東大全共闘代表として活動した当時を振り返ったもので、強靭な頭で考え抜き行動した氏の20代の記録として読み応えがありますのでご紹介させていただきます。もちろん、東大紛争自体には入試が中止になった世代の方々を筆頭として、いろんな思いはあることと思います。

一方、筆者の学生時代は英国の哲学者 Bertrand Russell（1872–1970）が亡くなって間もないころでした。Russell の簡潔明瞭で美しい文章は受験英語では英文解釈の問題としてもよく出題されましたし、核兵器に関するパグウォッシュ会議やベトナム戦争に関する Russell 法廷など、大きな影響を受けたのは筆者に限らないと思います。その Russell の膨大な著作の中で、たまたま出会った以下の言葉（アメリカの13歳の生徒からの手紙に対する返事）は、教育の原点にあるものとして、筆者が座右の銘としているものです。

March 26, 1962

Dear Mark Orfinger,

Thank you for your admirable letter which I read with great interest. I am sorry not to have answered it earlier.

I believe that the main object of education should be to encourage the young to question and to doubt those things which have been taken for granted. What is important is independence of mind. What is bad in education is the unwillingness to permit students to challenge those views which are accepted and those people who are in power. It is necessary for new ideas to

emerge, that young people have every encouragement to fundamentally disagree with the stupidities of their day. Most people who are respectable, and most ideas which are considered to be fundamental are barriers to human achievement.

I feel that it is not as important to learn large numbers of things as it is to feel passionately that one has the right to disagree and the obligation to develop new ideas. (omit)

With good wishes,

Yours sincerely
Bertrand Russell

"*Dear Bertrand Russell, a selection of his correspondence with the general public 1950–1968*," pp. 106-107, George Allen and Unwin, 1969.

４．大学について

安倍内閣主導で「働き方改革」が2016年9月から進行しています。筆者はその子細をフォローしているわけでもなく、また熟慮してきたわけでもありませんが、時間、賃金、保育施設などの改革の重要性もさることながら、もっと仕事の背景となる日常的なところで“こころ”の改革の重要性が必ずしも十分には認識されていないように思えます。

筆者は大学にしか身をおいたことがなく、狭い世界しか知りません。そのような筆者でさえ、「個人レベルのこと」との批判を覚悟の上で話題にさせていただければ、ほぼ同年の教員どうしが師弟関係でもないのに“先生”と呼び合う世界、また外部の組織に対する遠慮を伴う場合はともかく同じ組織内であるにもかかわらず事務の方々は毎回のメールを「お世話になっております」で始めるという教員―事務員間の非対称な世界（お世話になっているのは間違いなく教員の方ですが）は、世間的に見てもどうなのかと思っています。企業ではお互いに「さん」で呼ぶようにしているところも多い昨今です。そして、学内に限らず、“先生”どうしが“先生”と呼び合うものですから、産官学が集う学会等でも産官の方たちもやむなく？“先生”と呼ぶことが多いように思います（＊2、＊3）。

（＊2）アンケート結果：学会の場での「先生」と「さん」の呼び分けについて（吉田英生 2009年12月） https://www.jsme.or.jp/ted/enquete1_by_chair.html

（＊3）同窓会である京機会でも、以前はそのような傾向が強かったと思いますが、ここ何年かの運動が功を奏し師弟関係以外ではかなり緩和されたと思います。

そのようなことを考えるたびに思い出すのは、わが国でのトランジスタ研究のパイオニアのひとり菊池誠氏（1925–2012）が1960～61年のMIT留学体験に触れた以下の文章です。

その小さい驚きの中で、いちばん胸に答えたのは、ある日の午前中のコーヒー休みのでき事であった。

わたしの研究室の下、地下に自動販売機が並んでいて、午前と午後の休みに、わたしはよく

そこでコーヒーや、アイスグリームを口にした。
　第一に、このアメリカ的な機械に、わたしは別にそれほど違和感を覚えなかったこと、第二にそこでよく立ち話ができたこと、それが理由であった。なくなった声楽家の藤原義江が、アメリカのコーヒーの自動販売機は、いつも決まったところでピタリと止まるから味気ない、とよく話していたが、わたしには生来そういう反撥を持つところが無いので、好んでそこに行った。
　今でもアメリカの出張で M.I.T. へよると、この場所に行ってアイスクリームをとり出し、食べながら、昔のことを思い出す。懸命な生き方をしていたころのことが頭に浮かんで、アイスクリームがほろ苦くなることもある。
　さて、その日、いつものように、そこに行ったら、電気工学科のボスのエライアスと、床そうじのおじさんのジミーとが、紙コップのコーヒーをすすりながら、税金の話をしているのである。
　どう見ても、アメリカの『平民社会』の姿がそこにある。
　仕事という契約の世界では厳然として立場の上下がありながら、一私人にもどる時、人びとは、本質的平等をとりもどす。封建性のきらいなわたしは、この二人の立ち姿を、しばらくうっとりながめていた。

『エレクトロニクスからの発想』（講談社ブルーバックス 1982）

「仕事という契約の世界では厳然として立場の上下」という表現もあるので、前述の「非対称性」を完全に排除する文脈にはなっていませんが、今から60年近く前という時間差を考慮しつつこの情景を想像すると、何ともいいなと思います。

　最後に、これまで関連付けてきた1960年代から例外的に現代に戻らせていただきます。働き方改革の日常的インフラ面として付け加えますと、最近の企業で積極的に試行されている空間作りにも多いに学ぶところがあると思います。そのような空間作りの極致ともいえる、かの Steve Jobs らが設立した Pixar 社の社屋に関する文章を引用します（下線は筆者）:

Built on the site of a former cannery, Pixar's fifteen-acre campus, just over the Bay Bridge from San Francisco, was designed, inside and out, by Steve Jobs. (Its name, in fact, is The Steve Jobs Building.) It has well-thought-out patterns of entry and egress that encourage people to mingle, meet, and communicate. Outside, there is a soccer field, a volleyball court, a swimming pool, and a six-hundred-seat amphitheater. Sometimes visitors misunderstand the place, thinking it's fancy for fancy's sake. What they miss is that the unifying idea for this building isn't luxury but community. Steve wanted the building to support our work by enhancing our ability to collaborate.

Edwin Catmull,"*Creativity, Inc.: Overcoming the Unseen Forces That Stand in the Way of True Inspiration*," Random House, 2014.（邦訳 ピクサー流 創造するちから、ダイヤモンド社）

もちろん、これは同社の莫大な財力あっての話ですが、そのような財力とは無縁の大学でも、みんなの知恵と気持ちをあわせ、ちょっとした工夫で快い空間を作り出せないかと思います。どちらかというとお互いに個人プレー優先で個別の部屋にこもりがちな大学ですが、学内の多くの人たちともっと自然なコミュニケーションが生まれるような仕事空間・雰囲気を生み出せたらと願っています。

ウエスティングハウス社とアメリカ合衆国の思い出（7）

中谷 博（S34/1959卒）

１３．有料道路を利用してジャージーシティー（Jersey City）へ

写真7.1

一週間のフロリダ半島の旅行を終えて、ニュージャージー州のジャージーシティーに向けて、車でピッツバーグを出発した。有料道路のPennsylvania Turnpikeを車で走るのは初めてだったが、ジャージーシティーに向かって高速で車を走らせた。Pennsylvania Turnpikeは、オハイオ州からピッツバーグを通り、途中ペンシルバニア州、州都のハリスバーグを通り、フィラデルフィアまで約750kmの州間高速道路であり、有料のハイウェイでもある（写真7.1）。Pennsylvania Turnpikeは、アメリカ全域に広がる州間高速道路（Interstate Highway）の一つでI-76と表示されている。（アイゼンハワー大統領時代、連邦高速道路法により1956年から整備されたInterstate Highwayの総延長は、約68500kmである（写真7.2）。アメリカ全土の道路総延長は、統計によると約600万kmであるから、Interstate Highwayは、全体の1%強に過ぎないが、利用割合では約25%ということである。その中で

写真7.2

有料道路の総延長は約5700km程度で、有料道路の占める割合は少なく、大部分は無料である。アメリカ西部では、無料のハイウェイが多く、東部では、有料のハイウェイが西部よりは多いようである。Interstate Highway以外の都市を中心とする幹線道路が約25万kmあり、その利用割合は約30%程度ということである。）

バッファローでは、寒さのため車のバッテリートラブルで、AAAのお世話になることが多かったので、高速道路での長距離走行には多少の不安があった。当時Pennsylvania Turnpikeは交通量もあまり多くなく、時速100km程度で車を走らせていたが、フィラデルフィア近辺で、走行する車の量が非常に少ないので、何気なく通常の走行レーンでないエクスプレスレーン（Express Lane）を走らせていた。すると、突然警笛を鳴らしたパトカーがやってきて、警官が車を止めるよう手で指示をした。こちらは交通違反をしている意識が全くなく、そのまま走行を続けていたら、パトカーがさらに追いかけてきて、警官が怒っている様子なので、止むなく車を止めることにした。理屈の上では、エクスプレスレーンは、前の車を追い抜く時に使うものであるが、ガラガラのエクスプレスレーンを走っていても、誰にも迷惑をかける訳ではない。警官に車を停止させた理由を尋ねると、必要以上に長時間エクスプレスレーンをキープするのは違反だという。しばらく2人の警官が私の処置について何か話し合っていたようだったが、結局パトカーに乗せられて、高速道路に面したPolice Stationへ連行される羽目になった。Police Stationでは、担当の警官がタイプライターをたたいて事務的に書類を作成していたが、結局15ドルの違反金を取られることになった。15ドルあれば、ホテルに一泊できる金額である。止むを得ず15ドルを支払うと、担当の警官が「Thank You Sir.」と言って「違反金」を受け取った。交通を取り締まる警察は、人の弱みにつけこんで、いい金儲けをしていたようだ。現在の日本の高速道路では考えられない交通違反である。

ジァージーシティーまで行く予定であったが、予期せぬ事態になったので、フィラデルフィアで一泊することに予定を変更した。Marriot Hotelというホテルを見つけたので、このホテルに泊まり、翌日ジャージーシティーに行くことにした。Marriot Hotelはフィラデルフィア市の西端にあったが、かなり大きくて割合感じの良いホテルであった。チェツクインしてから、ホテルのボーイが駐車場まで荷物を取りにきてくれた。その時、普通ならチップを渡すべきだったが、その時は交通違反金を取られた後で、気分が悪かったこともあり、チップを渡さなかった

ためか、その後のボーイの態度が、かなりぶっきらぼうになったような気がした。アメリカでの生活にある程度慣れて、チップを出来るだけ省いていた矢先の出来事である。翌日、Marriot Hotelを朝早く出発して、今度は有料高速道路のNew Jersey Turnpike（Interstate Highway I-95）を利用して目的のジャージーシティーへ向かった（写真7.3）。この高速道路も、交通量はあまり多くなく、目的のジャージーシティーに到着した。

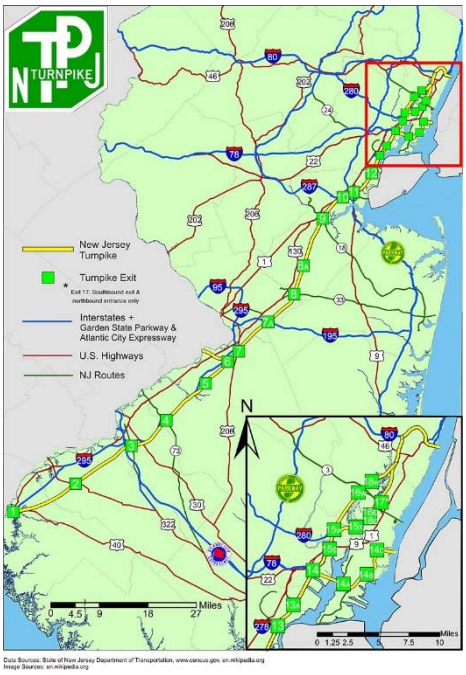

写真7.3

１４．ジャージーシティーとウエスティングハウス社の工場について

ジャージーシティー（Jersey City）は、ハドソン川を隔ててニューヨーク市のロワーマンハッタンの対岸に位置する人口第二の都市である。西には、ニュージャージー州最大の都市ニューアーク（Newark）が位置する。ジャージーシティーにジァーナルスクェア（Journal Square）という広場がある。ジァーナルスクェアは、電車やバスでニューヨークやニューアークへ行く場合の起点になる場所である。この広場に面して、Hotel Plazaというホテルがあることを聞いていたので、取りあえずこのホテルに泊まることにした（写真7.4）。あまり大きなホテルではないが、部屋の窓からハドソン川を隔てた対岸のマンハッタンの摩天楼が間近に一望出来て、特に夜間の眺めがすばらしかった（写真7.5）。翌朝食事を済ませて駐車場に出ると、私の車に2枚のタグが貼られているので、驚いてよく見ると、駐車時間オーバーのタグであった。ホテルの駐車場と思っていたが、何故か横に駐

写真7.4

写真7.5

車時間を示すメーターが立っている。どうやらこの駐車場は、市が管理する駐車場のようであった。僅か10時間程度の間に、2回も時間オーバーのタグを貼られるとは、ジャージーシティーは、他の地域とは様子が違うようで、特別に注意が必要だ。タグと超過料金5ドルを持って警察署に出頭するよう指示されていた。しかし、警察署より先にウエスティングハウス社へ出頭しなければならない。

ウエスティングハウス社のジャージーシティー工場を探して、地図をたよりに車を走らせて、ハドソン川に近いPacific Avenueで工場を見つけることが出来た。まず、身分証明カードを見せて通用門を通り、庶務の部門で入退用のカードを発行してもらった。Section Managerのシアーニという人に会い、技術部門へ案内された。最初に会ったのは、技術部門の窓口になる人で、Assistant to Engineering Managerのインマン（Inman）という、がっちりした体格のかなり年配の人であった。技術部門のManagerのマイク クラーク（Mike Clark）さんに紹介され、以後、この人の指示によって、研修が行われることになった。マイク クラークさんは、MIT出身のエンジニアであった。引き続いて、技術部門のエンジニアに順次紹介された。Mechanical Engineerのトニー ワトコスキーさんは、名前からしてロシア系らしい。同じくMechanical Engineerのアーサー ボーグルさん。「ボーグル」はVogelである。ドイツ語読みでは「フォーゲル」で、鳥である。ドイツ系らしい。Electrical Engineerの若くて背の非常に高いルー カプアーノさん。イタリー系らしい。まつ毛が非常に長いのが印象的であった。その他、数人のエンジニアに紹介されたが、何とかビッチというセルビアなどの東欧系の名前の人もいて、かなり国際的である。中国系のエンジニアも一人いた。この人達の中には、後の研修でかかわりを持つことになるエンジニアが何人かいた。彼らとしばらく話をしていた時、急に思いついて、気になっていた車に貼られた時間オーバーの違反金タグの処置について聞いてみた。すると、皆揃ってそんなものは破って捨ててしまえと言う。彼らの言うとおりに、警察には行かないことにした。（何か月たっても警察からの音沙汰は全く無かった）その後、部屋の入り口にデスクを構える秘書のクレアという女性にも紹介された。奥の部屋にいるEngineering Managerのサンティーニさんにも紹介されたが、この人もイタリー系らしい。かなり年配の人のように見受けられた。当時、三菱電機、名古屋製作所、昇降機技術課の宮城課

長が約一年前にジャージーシティーの工場に技術調査で出張したことがあり、この人の名前は聞いたことがあった。

写真7.6

研修に先立って、宿泊する施設を見つける必要があった。ジャージーシティーでは、治安が悪く、一般家庭での下宿は考えられなかった。庶務のManagerシアーニさんの案内で、ジャージーシティー工場からあまり遠くない所にあるYMCAに案内されて、部屋や中の設備を見た上で契約した（写真7.6）。設備の中には、テレビの備え付けられたラウンジ、室内プールや自動車の駐車場があった。また、朝食程度の軽い食事をするカフェもあった。駐車場の出入には、「トークン」（Token）を使ってゲートの開閉を行うということだった。「トークン」というのは、金属製でコインに似ているが、特定の場所でしか使えないもので、当時は、ニューヨークの地下鉄の改札でも「トークン」が一般的に用いられていた。部屋の料金は、一週間で10ドル、駐車場のトークンの料金は別に支払う必要があった。YMCAの建物は、Bergen Avenueに面した6階建てで、House Numberは654、5階にある部屋で、部屋のナンバーは541であった。風呂は、バスタブはなく、共同シャワー室があるのみで、他の地域での下宿とは随分環境が違っていた。部屋の掃除は、毎日年配のおばさんが来て、「Make Bed」もしてくれた。男ばかりが居住するYMCAは、建物内での環境が違うので、当初は戸惑うことも多かった。廊下で、裸同然の男が悠々と闊歩しているのは、ごく普通の光景であった。ラウンジでは、素性の分からない雑多な男ばかりがたむろするのも殺風景であった。部屋の窓からは、室内プールで泳いだあと、日光浴をしている姿が見られた。しばらくすると、ごく自然にこの環境に慣れてしまった。5階の廊下の端から、ハドソン川にあるリバティーアイランドの自由の女神像（Statue of Liberty）の後ろ姿を遠望することが出来た。（この建物は、1923年に建てられたが1995年にYMCAの使用が終り、1999年にNational Register of Historic Placesに加えられることになったとのことである。）

Bergen Avenueは、ジャージーシティーの主要な道路の一つで、街の南北方向に走り、ジャーナルスクェアを通り、さらに北部のホボーケン（Hoboken）に通じている。ホボーケンは、有名な歌手で俳優のフランク シナトラの出身地であり、フランク シナトラ記念公園がある。ジァーナルスクェアには、映画館があった。

当時上映されていたのは、ヒッチコック監督の映画「Bird」で、1963年の上映であったが、帰国してからも「鳥」というタイトルで上映されたので、改めて見直した。ヒッチコック監督らしい非常に特異な映画であった。Bergen Avenueに沿って、映画館が他にもあり、「The Longest Day」のような、第二次世界大戦の「ノルマンディー上陸作戦」を扱った大作や、アカデミー賞を受賞した、グレゴリーペック主演の「To kill a Mockingbird」なども上映されていた。日本では、「アラバマ物語」というタイトルの映画だったと思う。その他、「The Days of Wine and Roses」という映画は、名優ジャツク　レモンが出演していたので、楽しい映画かと思って見に行ったら、アルコール中毒患者を扱った、かなり深刻な映画であった。この作品も「酒とバラの日々」というタイトルで、日本でも上映されたと思う。

Bergen Avenueには、洋食レストランが数軒あり、夕食は、これらのレストランを利用することが多かった。当時は、日本食のレストランは皆無で、中華料理店が一軒あった。ジャージーシティーでは、黒人の子供を見かけることが多かったが、私のことをChinese Manと呼んでいた。どうやら中国人と思っているらしかった。工場での研修が終わって、YMCAの駐車場に入ろうとすると、入り口のゲートに黒人の子供たちが集まってきて、ゲートを開くためにトークンを入れてやるので5セントをくれと言う。断るとその時はあきらめるが、毎度その繰り返しであった。5セント硬貨を「ニックル」というが、「Give me Nickel」という訳である。クリーニング店やBarber ShopもYMCAの近くにあり、郵便局はYMCAから100m位の所にあったので、日常生活に困ることは特になかった。

１５．ジャージーシティー工場及びエレベーター据え付け現地での研修について

ジャージーシティー工場での研修が始まった。先ず、Managerのマイク　クラークさんに、エレベーターに関して、現在進めている技術開発で、何が重要な課題になっているのか質問した。すると、ウエスティングハウス社で、エレベーターの制御方式で「Drag Magnetic Regulator」を開発していて、制御機器の制御精度に問題があり、技術的課題を解決するために工場内でも、据え付け現地でも試行を行っているとのことであった。Drag Magnetic Regulatorは当時、三菱電機、名古屋製作所でも、ウエスティングハウス社からの技術を導入して、試行しているとの情報を得たので、私も見聞のため、工場と据え付け中の現地の見学をさせてもらうことにした。

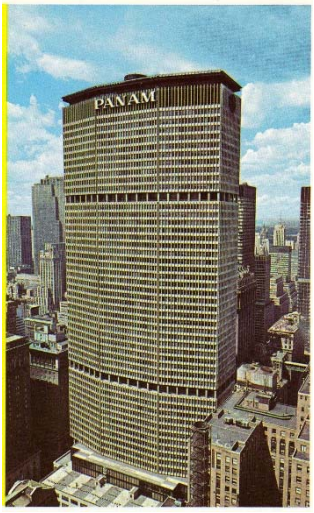

写真7.7

写真7.8

エレベーターの据え付け現地とは、当時パンアメリカン航空の本社ビルとして、ニューヨークに建設中の「PANAMビル」（写真7.7）であった。竣工間近で、鋭意エレベーターの試行運転を行っていた。PANAMビルの高さは、246mで、地上59階、エレベーター数23台である。（PANAMビルは、1970年代になるとパンアメリカン航空の経営が悪化して1981年にMetropolitan Life Insurance Company に売却し、PANAMが、事業を停止してビル名もMet Lifeビルに変更された（写真7.8）。）

ウエスティングハウス社では、エレベーターの運転試験のほか、「非常止め」のような機械的な安全装置の性能試験までも、据え付け現地で行っていた。（日本国内では、機械的な安全装置の性能試験は工場にある試験塔で行うのが普通である。）私が、現地の見学を希望すると、現場の技術者に電話しておくから、一人で行って来るように言われた。地下鉄を使って、パークアベニューに建設中の「PANAMビル」へ一人で行くことになった。PANAMビルには簡単に行けたが、電話もなく、ビルの機械室へ連絡する方法が分からなかったので、やむなく階段を利用することにした。59階まで歩いて登るのは、かなり大変だったが、なんとか機械室にたどり着くことが出来て、現地の試験を担当するエンジニアに会うことが出来た。エレベーターの運転試験を行っていたのは、新しく開発した制御方式の「Drag Magnetic Regulator」の性能試験であった。「Drag Magnetic Regulator」は、機械室に設置している制御盤に、エレベーター本体の動きの1／96の動きをする可動装置が設けられていて、制御盤内で動く可動装置を制御することによって、エレベーター本体の上下方向の位置を制御するようになっている。制御盤内の可動子の動きを見ていると、エレベーター本体の位置がよく分る。オモチャのエレベーターが動いているようで、見ていて楽しい。エレベーターの上下方向の移動の制御は、1／96の縮尺で動く制御盤内の可動子によって、大まかな位置制御をし、併

せて、カゴと昇降路に設置されたセンサーによってよってカゴ床と乗り場床の床合わせを精密に制御するようになっている。(三菱電機でも、当時はDrag Magnetic Regulator方式を採用していたが、現在は、独自に開発した制御方式を用いている。)一般のエレベーター据え付け現場の見学は、当初から要望していたが、ニューヨーク市の据え付け現場を見る機会を作ってもらった。この時は、私一人ではなく、エンジニアのアーサー ボーグルさんに同行していただいた。あまり大掛かりな物件ではなく、見学するのには手ごろな物件で、現地の据え付け作業者とも話をすることが出来た。「日本にはエレベーターがあるか」と聞かれたのには驚いた。据え付け現場では、物品の盗難が多くて困っているとのこと、ニューヨーク近辺では、治安状況が、特に悪いようであつた。ただ、エレベーターの部品が雑然と置かれていて、盗難防止の対策が十分になされていないように見受けられた。

ジャージーシティー工場内での研修が始まり、最初に、機械エンジニアのトニー ワトコスキーさんの仕事の手伝いをすることになった。ワトコスキーさんは、ミシガン大学の出身の30代半ばのエンジニアで、彼自身ミシガン大学は非常にいい大学だと言っていた。私に与えられた仕事の内容は、PANAMビルで行った「非常止め」の性能試験の減速度の記録データから速度曲線を描くことであった。「非常止め」というのは、調速器による速度オーバーで、電気的にカゴ（Cage）の停止が出来なかった場合、定格速度の30%オーバーで機械的にレールを挟み込んで緊急停止させる安全装置である。乗用エレベーターの「非常止め」には、通常Gradual Safetyといって、緩やかにレールを挟み込んで停止させるようになっている。したがって、実際の据え付け現地でも、レールを傷つけることは殆どない。減速度のデータから速度を読み取って、速度曲線を描くことで、「非常止め」が正常に作動したことを確認することが出来た。Drag Magnetic Regulatorの関連では、電気関係のエンジニアのルー カプアーノさんがRegulatorの駆動装置の動きが滑らかでないことに問題をかかえていた。装置の内部に、多くの溝が設けられていて、潤滑油の流れが良くなくて、ステックスリップ現象があるのが問題らしかった。私が機械関係のエンジニアだから、流体に関して得意だろう。溝の形状で何かアイデアがないかと言われたが、その時は、急に良いアイデアを思いつくことが出来なかった。

設計室の壁に、mmとinchの換算表が貼り付けてあった。ウエスティングハウス社の図面は、全てインチで表示されていることは、三菱電機にいる時に、見てい

たので知っていた。図面には1／4inch、3／8inch、7／32inchなどの分数の表示が至る所に出てくるが、多分設計の段階では、ミリ単位で計算しているらしい。図面作成の段階で、インチに変換して表示する必要があるのだと思われる。インチからミリへの変換は非常に問題が多く、簡単にはいかないようである。

１６．工場内のカフェテリアと昼食時間の過ごし方について

工場によって状況が異なるが、ジャージーシティー工場には、昼食用のカフェテリアがあった。家から飲み物や弁当を持参する人もかなりいるようであった。一緒にテーブルについて、食事をすることが多かったが、この時の話題には、自動車に関することが多かった。自分の自動車のことを「My Machine」と言っていたが、彼らは、自動車の修理を自分でやる人が結構多いようである。当時は、公民権問題についての話題も多く、人種問題や、宗教についての議論をたたかわせることもあった。ある時、同じテーブルを囲んでいた東欧系のエンジニアに「広島の原爆」について、聞かれたことがあったが、すぐに話題を変えて、あまり深入りしたくないようであった。広島や長崎の原爆投下について、日本人が、どのように受け止めているか気にしているようであった。昼食後、皆そろって工場内の庭に出て時間を過ごすことが多かったが、天気のいい日には、ハドソン川を隔てた対岸にマンハッタンの高層ビル群が間近に見えた。

１７．ジャージーシティーの荒廃と再開発について

私が滞在した1960年代から都市の荒廃が進み、富裕層が郊外へ流出する一方で、貧しい労働者層が流入し、犯罪率が上昇し、市民の不安、経済の危機に苛まれるようになった。ジャージーシティーでは、労働者の多くが職を失うようになり、市内のほとんどの地区が荒廃したようである。1990年代に入ると、ジャージーシティーでも再開発が進むようになり、人口と治安が回復し始めた。空家と化していた建物は改装され、交通インフラも整備された。ウエスティングハウス社のジャージーシティー工場が建っていた地域も、再開発の一環として再生したと思われる。環境と治安の回復と共に、マンハッタンで働くプロフェショナルたちも移住してくるようになった。メリルリンチなどの大手金融機関が、ジャージーシティーに拠点を置くようになった。ゴールドマンサックスタワーをはじめとする超高層のオフイスビルやアパートが立ち並ぶ職住近接の郊外都市になった。（写真

7.9）は、Jersey CityのLiberty Parkから見た金融機関の立ち並ぶビル群の写真である。（写真7.10）は自由の女神像、（写真7.11）は高層ビル群の写真である。

写真7.9

写真7.10

写真7.11

（次号に続く）

淡路島紀行（その5）安藤忠雄建築

藤川卓爾（S42/1967/長尾研卒）takuji-f@gsc.gr.jp

淡路島にはいくつか安藤忠雄さんがデザインした建築物があります。

島の北端の岩屋には淡路夢舞台があります（写真1、図1）。淡路夢舞台は関西空港埋め立てのために土砂を採取した跡地に作られた複合施設です。

写真1　淡路夢舞台全景

図1　淡路夢舞台マップ

＜出典：http://www.yumebutai.co.jp/ando/＞　＜出典：http://www.yumebutai.co.jp/map/map.html＞

淡路夢舞台と環境への取り組みについてThe Westin Awaji IslandホテルのHP＜http://www.westin-awaji.com/guide/eco.html＞には下記のように記されています。

「淡路夢舞台は、関西国際空港などの大阪ベイエリアの開発のために土砂を採取した跡地でした。一度は人の手によって破壊された地を、再び緑の大地に甦らせようと、苗木を一本一本植えることから始め、人と自然の交流のステージを造り出す環境創造型プロジェクトとして造られました。」

また、淡路夢舞台のHP＜http://www.yumebutai.co.jp/ando/＞には安藤忠雄さんのメッセージが記載されています。

「21世紀はもはや、放っておけば自然が環境を整えてくれる時代ではなく、一人ひとりが強い意志をもって、積極的に自然に働きかけながら、環境と共生していかなければならない時代です。庭の木々や小川、六甲山や大阪湾といった身近な自然から地震などの天災も含めた地球規模の長期変動に至るまで、私たちが生きている「環境」に対する意識を少しでも高めるきっかけになればと考えています。」

インターネットで見つけた安藤忠雄さんの「環境と再生～瀬戸内海を通して～」

と題する講演会のメモによると、最初はこの跡地にゴルフ場を作る計画があり、クラブハウスの設計を依頼されたそうです。でも、ここはゴルフ場より国立公園のような場所にして国際会議場など自然と調和した施設にしたかったそうで、依頼をホゴにして当時ずいぶん恨まれたが、ゴルフ場不振の昨今では「あのときゴルフ場にしなくってよかった」と感謝されているそうです。<http://hiroko.s11.xrea.com/x/main/act_locally_2/act_locally_2-18.htm>

平成12（2000）年にはここを会場として淡路花博ジャパンフローラ2000が開催されました。また平成27（2015）年にはジャパンフローラ2000の15周年を記念して淡路花博2015花みどりフェアが開催されました。

淡路夢舞台には国際会議場（写真2）やウエスティンホテル淡路（写真3）や奇跡の星の植物館があります。また、百段苑という花壇もあります（写真4）。

写真2　国際会議場
＜出典：http://www.yumebutai.co.jp/ando/＞

写真3　ウエスティンホテル淡路
＜出典：http://www.yumebutai.co.jp/ando/＞

写真4　百段苑

写真5　国営明石海峡公園

淡路夢舞台の隣には国営明石海峡公園があります。国営明石海峡公園は「自然と人との共生、人と人との交流」を基本理念とし、明石海峡を挟んだ淡路市の「淡路地区」と神戸市の「神戸地区」の2地区で構成されています。
ここにもたくさんの花が咲いています（写真5）。

淡路夢舞台から東海岸を少し南側に行った浦という町に本福寺があります。本福寺は真言宗御室派の寺院で平安時代後期に創建され、淡路四国第五十九番霊場になっています。本尊の薬師如来像は淡路市の重要文化財に指定されています。本福寺の本堂は長径40m、短径30mの楕円形の池の下にあり、別名水御堂と呼ばれています（写真6～9）。

写真6　本福寺本堂航空写真
<出典：本福寺絵葉書>

写真7　水御堂のアプローチ

写真8　水御堂の蓮池

写真9　水御堂の入口階段

本堂の建て替えを相談された安藤忠雄さんがこのアイデアを提案したところ、住職をはじめ檀家の人達は猛反対だったそうです。ところがある高僧がそれもいいのではないかといったというので急遽この案が実現したとのことです。このことに関してWikipediaから抜粋したエピソードを次に示します。

「設計にあたり安藤は、「お寺とは何か」という考察から始め、「人が集まり、心の豊かさを感じられる空間」という結論に達した。信者からは、とにかく寺に人が来ない。魅力的にして人が来ることで心のよりどころにしたいとの思いを聞かされていたが、通常寺には大屋根があり、これは権力の象徴であるため避けたい。権力ではなくハスをシンボルにする。そのために、楕円形の水盤を作り、その中に人が入ってゆく。水盤を池にして仏教の原点であるハスの花をいっぱいに咲かせる。ハスの中に入る寺にしたい。と、信者らの前で説明したが全員に反対された。さすがに全員反対には驚いた安藤がとった策は、京都の当時すでに90歳を超える高名な僧侶、立花大亀に意見を求めることであった。安藤から話を聞いた立花は「これはいい。なぜなら仏教の原点のハスの中に入るというのは一番良い姿だ。自分も冥土へ行く前に見たい」といい、2、3人の檀家代表に話をした。次の回に出席すると、同じ信徒らの意見は180度変わっており、全員賛成だった。」蓮池には紅白などのスイレンのほか、約2000年前の地層から発見された大賀ハスが浮かび、開花の時期には水面を彩ります。写真10は7月中旬に撮影したものです。

写真10　水御堂の蓮の花

写真11　TOTOシーウインド淡路のエントランス

東海岸の中程の津名港や志筑を通ってさらに南に行くと塩田という三差路があります。ここから右折して丘の方に入ってしばらくして今度は左折していくと山の上に別荘地「海平の郷」があり、ここにTOTOシーウインド淡路があります。淡路島の東海岸はこの付近では山が海に迫っていて、海岸沿いの国道28号線は東側の海と西側の切り立った崖の間を走っています。TOTOシーウインド淡路は高低差約100mのこの崖の斜面を利用して建てられています（写真11～写真14）。

写真12　TOTOシーウインド淡路

写真13　TOTOシーウインド淡路

＜出典：https://www.seawind-awaji.jp/＞＜出典：https://www.seawind-awaji.jp/＞

写真14　エントランスから
見たエレベータータワー

写真15　展望ブリッジより
プールと大阪湾を望む

エントランスは山側で敷地の最上階から入ります。フロントデスクを過ぎると広い階段があり正面に大阪湾を眺めながら降りて行きます。客室フロアへのエレベーターに乗るには展望ブリッジを渡りますが、文字通り「海と風」を感じることができます。

TOTOシーウインド淡路はTOTOの社員保養施設として建設されましたが、ホテルとして一般にも開放されています。もちろん客室備え付けの水回りはTOTOの製品です。大阪湾を眺めながら泳げるプールもあります（写真15）。

（次号に続く）

第13回 京機ミュージックカフェ レポート
土肥絵里香さん、ニューヨークから帰国ピアノコンサート
～ニューヨーク発ピアノコンサート「BLUEPRINTS Piano Series」～

北野幸彦（S56/1981卒）

日時：2018年7月29日（日）13：30～
場所：青山音楽記念館（京都市 阪急上桂からすぐ）

京機会ミュージックカフェではすっかりおなじみの、京機会会員　土肥さん（S52卒）のご令嬢「土肥絵里香さん」がニューヨークからの2018来日公演です。

今回のコンサートは？

テーマ『ノスタルジアとおとぎ話』

ニューヨークで大好評のソロピアノコンサート「BLUEPRINTS Piano Series」の初日本公演。ノスタルジアとおとぎ話を元にしたシューベルト・アルベニス・ラベルの曲をソロと連弾。

【プログラム】

シューベルト●ピアノソナタNo.21 D.960
アルベニス●イベリア第１巻
　　エヴァカシオンと港
ラベル●夜のガスパール スカルボ
ラベル●マ・メール・ロア

【演奏】

土肥絵里香さん
Daniel Anastasio

本人もMCでおっしゃってましたが、今回は、これまでとはうってかわってピュアクラシック。ご主人Danielさんとの出会いをきっかけに原点に戻られたとか。そして、ピアノのみのコンサート。私もピアノのみのコンサートは実は久しぶりでした。

会場の音響設計の素晴らしさもあいまって、会場内は、ピュアなピアノ音のみで2部構成の2時間が満たされました。

ピアノは、弦をハンマーでたたく打楽器の側面があります。だからエリカさんの指が弦をたたいていることになります。それは強弱さまざまではありますがアタックのある「粒」の集まりであり、その繊細な粒を聞き漏らすまいと聞いておりました。が途中から粒ではなく大きなうねるような流れをともなう連続体になって体中に伝わってきます。粒子であり連続体である。このまかふしぎな説明を大学の講義でも聞いたような。そんな理系な分析をしたくはなかったのですが、透明で美しい音の洪水に、空間が満たされ、自然に脳内が研ぎ澄まされた感覚になり勝手にニューロンが動き回ってしまったのです。

こんな感覚にさせていただいた演奏は、本当に久々のことであり、ほんとうに「いい時間」をすごさせていただきました。

写真の皆さんのお顔も、よどみのないすっきりしたお顔になってます。

エリカさん、土肥さん、ほんとうにありがとうございました。

卒業60周年京岬会（昭和33年卒）同窓会

中村弥寿家（S33/1958卒）

京岬会同窓会を平成30年10月15日沼津リバーサイドホテルにて13名の参加の下、盛大に開催した。本年は記念すべき卒業60周年であり当会の歴史を纏めた資料作成や会を讃える文や詩を披露する等趣向をこらした。

会は總会、続いて2次会と夫々和気藹々、喧々諤々の下に進み、翌日は好天に恵まれたバスツアーを行った。

１．総会

梅本幹事の司会の下、小澤君の挨拶と乾杯でスタートし下記の5題の小講演が行われた。

①「京岬会の変遷」（梅本幹事）今年は総会23回目で平成12年からは毎年実施している。又同窓生のこれまでの出席状況も報告された。

②「京機会と京岬会の活性化」（野田君）京機会のコンセプト「機械系工学関連の研究の発展と会員相互の親睦を図る」の紹介や京機会の組織や活動状況の説明があった。京岬会の京機会ニュースへの投稿は平成16年10月の総会報告が初めてでその後京機短信を含めて12回の投稿がなされている。

③「京岬会賛歌」（上田君）当会で活動している「談風会」「風の広場」の思いの深さを紹介。ご本人が開いているブログ「異論な話」は現在79話に至り、CIA（想定）も読者になっていることも紹介。

④「京岬会ゴルフのすばらしさ」（岸本君）当会のゴルフコンペは累計73回に及び入賞者の統計表もまとめて発表。スコアに関係無く楽しい会である。現在も年3回の開催で10名の参加がある。

⑤「京岬会60周年の詩」（倉田君　ペンネーム岬風太郎）37行の自由詩で我が京岬会の活動や会員の状態を適確に詠い上げている。

上記後、来年度の総会は相談により　2019年10月15日（火）になった。

写真1：集合写真
小澤三敏　岸本秀弘　杉本三郎　上田一成　仁科稜三　中村達　倉田武彦
野田忠吉　池村澄男　新田敏夫　梅本毅　中村弥寿家　造田恵市

２．2次会（部屋を変え朝霧の間にて）

今回は従来型の近況報告をやめにして京大機械科時代の思い出を中心にめいめいが報告を行った。昔の秘話や昭和32年頃の新大学物語京大編工学部機械工学科の新聞連載特集の紹介もあった。

最後に杉本君のフルート伴奏による「南国土佐を後にして」三高寮歌「琵琶湖周航歌」「逍遙歌」の大合唱で1日目はお開きとなった。

写真2：倉田君スピーチ

写真3：杉本君フルート伴奏

３．バスツアー

翌日16日は幹事企画のガイド付の貸切バスによる伊豆観光旅行に出かけた。行先は　①柿田川湧水群　②沼津御用邸　③江川邸（韮山役所跡）④韮山反射炉　⑤昼食（於　鳴沢蔵屋）　⑥三島スカイウオーク

絶好の天気に恵まれ冠雪の秀麗富士にも迎えられた。車中のバスガイドの説明や各所で観光。

ボランティアガイドさんの熱心な説明を受け昼食には韮山の美味しい地ビールを楽しみ、メンバーに恵まれた素晴らしいツアーを満喫した。

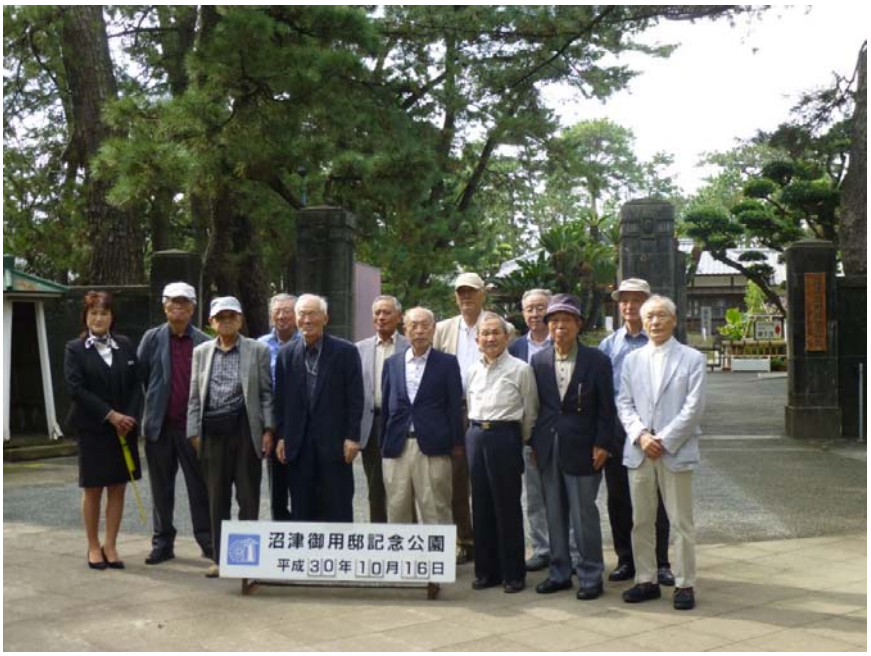

写真4：沼津御用邸前

写真5：韮山反射炉見学

昭和35年卒同窓会

矢部 寛（S35/1960卒）

平成30年10月21日（日）～22日（月）に、滋賀県長浜市にある「北ビワコ　ホテルグラツィエ」で同窓会を開催しました。奥様方5名を含め、17名が集いました。趣味の話、日頃の生活の話、健康の話、･･･といろいろな話題で盛り上がり、楽しいひとときを過ごしました。

翌22日には、竹生島クルーズを楽しみました。雲一つない穏やかな秋日和に恵まれ、奥琵琶湖の風光を満喫しました。竹生島では、年齢に負けず、急な石段を登り切り、名刹宝厳寺に参詣し、それぞれの想いをお願いしました。

次回は2年後関東での開催を目標とし、皆が元気に再会できること期し、盛会裏に散会しました。

大熊隆吉 松木健次 小西 博 初井英夫 上野喜章 徳重裕幸 太田脩二 寺井三信 矢部 寛 村上則一 大岡憲司

三島宏夫　小西夫人　大岡夫人　初井夫人　矢部夫人　大熊夫人

S58卒業の同期会

今谷勝次（S58/1983卒）

S58卒業の同期会は、オリンピックの年に開催しています。今回は37名の参加者を得て、グランヴィア京都にて盛大に開催されました。35年ぶりの参加となる稲口君の乾杯スターターではじまり、おじさんの会話が弾みました。

皆さんの近況報告ののち、酔っぱらい達の記念写真、35年ぶり参加の伊藤君の絞めにてお開きとなりました。

次回は2020年の東京オリンピックの年に予定しています。